

聖書：マタイ 18：1～14

説教題：子どものように

日時：2019年11月17日（朝拝）

今日の箇所です。弟子たちは「天の御国では、いったいだれが一番偉いのですか」とイエス様に尋ねます。彼らがこんな問いをしたのは重大な時が近づいていると感じていたからでしょうか。イエス様のこのところの色々な言葉は緊迫感を伴っています。だからいよいよ新しい時代が起こるのではないか。メシヤの国が到来するのではないか。そうしたらその国では誰が一番になるのだろうか。12弟子の中でイエス様の次に位置する人は誰なのだろうか。彼らはそのことに関心を強く向けていたのでしょうか。イエス様は受難予告を繰り返されて、下に、下へと向かって歩いておられる中、弟子たちは高い地位に上ることばかりを考えていた。そういう彼らの無理解、またアイロニーがここに示されているわけです。

しかし私たちも人のことばかり言えないと思います。私たちも複数の人が集まると同じ問いを発しやすいのではないでしょうか。この中で一番偉いのは誰か、口には出さなくても互いにランク付けを始める。この中で誰が一番頭がいいか。誰がいい学校を出ているか。誰が立派な仕事についているか。誰が高収入で生活レベルが高い人か。また誰が一番若い。誰が一番の美男子・美女か。誰のファッションセンスが一番上か。さらに信仰的に一番の人はだれか。そのように色々考えて自分が比較的上の方に位置すれば安心する一方で、自分が下の方にいると思うと居心地が悪い。また上の方にいると思うと高ぶって周りの人々をいつしか下に見る言動をするようになる一方、反対に下の方にいると思うと、上にいる人たちを妬み、何とかそこから引きずりおろそうとする。このように私たちもお互いを比べて競争し、どうにかして上へ、上へ、偉い人間になることへ、と目指して生きているところがあるのではないのでしょうか。しかしそのようなあり方は神の国の基準とは全く異なることをイエス様はここで弟子たちに教えておられます。

イエス様は一人の子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、こう言われました。「まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。」 まずイエス様は「向きを変えて」と言われました。つまり誰が一番偉いかと弟子たちが問うていたこと、そのこと自体、間違った方向を向

いているということです。そこから向きを変えなくてはならない。その考え方では偉い者になれないどころか天の御国に入ることさえできない。では向きを変えとは具体的にどうすることでしょうか。そこでイエス様は一人の子どもを呼び寄せて言われました。「この子どものようにならなければ、云々」と。これは子どもを理想化して述べた言葉ではありません。子どもは純粹・無垢であるとか、醜い権力争いはしないと意味ではありません。すべての人は生まれながらにして罪人であり、小さい子どももその点では全く同じです。これは当時の世界では特に子どもは社会の階層の中で重要な人々とは見なされていなかったことと関係します。身分として一番下の階層にいるような人たちです。大人と比べてできることは少ないですし、知識も少ないですし、お金も持っていませんし、人生経験も少ない。そんな彼らは「誰が一番偉いか」を論じる際、ライバルにはなりません。ですから弟子たちも、人々がイエス様のもとに子どもたちを連れて来た時、追い払おうとしました。そこに子どもたちに対する評価が現れています。お偉いイエス様、お忙しいイエス様は、子どもたちになんかに構っている暇はないというわけです。

ですから「子どもたちのようになる」とは、社会において子どもたちが見られているような位置に自分を置き、そのような者として自分を考えるということです。自分は全く偉い者ではなく、子どもたちと等しい存在であると考え、そういう者として行動することです。ここに改めて基督教の救いはどのようなものであるかを学ばされます。私たちは立派な人間になって天の御国に入れていただくのではないのです。むしろ何の主張もできない者が、ただ恵みによって入れていただくのが天の御国であり、救いです。そういう意味でこの御言葉は 5 章 3 節の御言葉と似ています。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」 心の貧しい人、すなわち自分には神の前に誇れるものが何もないことを自覚している人、ただ神の憐れみにより頼む人。そういう人だけが天の御国に入る者とさせていただけます。そのような者たちは誰が一番偉いかなどとは決して論じません。そういう考えが出て来るはずがないのです。偉い人などいないからです。むしろ反対に自らを低くする人こそ天の御国にふさわしい人、神の前に良しとされ、評価される人なのです。

さて自分を子どものように低くする人は、他の人との関係においても、その特性が発揮されて来るべきであるというのが 5 節です。「また、だれでもこのような子ども一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。」 ここでの

「このような子どもの一人」は、イエス様が真ん中に立たせた実際の子どもの含みますが、この後に出て来る「小さい者たち」、すなわち人々から小さく見積もられ、見下されているような人たちのことも含むと考えられます。自分を偉い人のように思い、「だれが一番偉いか」という議論に喜んで加わるような人は、偉い人とは喜んで関わりますが、そうでない人とは関わらないものです。価値の少ない人と交わっても時間の無駄であると。しかし自分を子どものように位置づけてへりくだっている人は、同じような小さい者たち、人々から注目されていない、見下されているような人たちを大切にします。特にここに「わたしの名のゆえに」とありますように、イエス様がそういう人たちを大事にしておられることを思って、その人々を大切な存在として尊んで、受け入れます。そうする人は「わたしを受け入れる」のだとイエス様は言っておられます。イエス様はその人たちとご自分を一つに結び付けておられます。ですからその人たちを受け入れることはイエス様を受け入れることです。その人はその人々を受け入れることによって、より深い主との交わりに生きる者とされるのです。

その一方、つまずきを与える人への警告の言葉が6節以降にあります。6節：「わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首にかけられて、海の深みに沈められるほうがよいのです。」 「つまずかせる」とは、相手の人がそこでつまずいてしまって、それ以上、信仰の道を歩いて行くことができないようにすることです。この文脈では特に小さい人々を受け入れず、拒否し、見下すことによってでしょう。すると、ただでさえ世から軽蔑され、軽く扱われている小さい人たちは気落ちし、落胆し、信仰が分からなくなり、ついには救いの道から足を踏み外してしまう。永遠のいのちに至る道を進めなくなってしまう。そんなつまずきを与える者は「大きな石臼を首にかけられて、海の深みに沈められるほうがよい」とまで主は言われます。主が大事にしている人々を、このように扱うことに対して主は厳しくさばかれると言うのです。7節に、この世には人につまずきを与える要素が沢山あることが述べられています。神に反抗するこの世界には、人を信仰の道から引き離そうとする力や動きが沢山あります。しかしそんな中で世に加担して、人につまずきを与える者はわざわざいだと言われています。

さらに8～9節では「あなたの手や足があなたをつまずかせるなら」とあります。他の人をつまずかせることも問題ですが、あなた自身をつまずかせることも問題だと言われています。ここを読んで思い起こすのは5章に記された山上の説教の主のお言葉では

ないでしょうか（5章29～30節）。そこでは情欲を抱いて女を見ることとの関連で語られました。ここではもう少し広く私たちの罪を問う文脈の中で語られています。以前も見ましたが、これはもちろん字義通りに実行すべきことではありません。罪を犯しそうな時、そのたびごとに手や足を切って捨てていたら、あるいは目を抉り出していたら、いくつあっても足りません。ここの意味はまるでそれを切り捨てたかのようにして、罪のために手足を用いず、目を用いないという戦いをすべきであるということです。さてこの6～7節と8～9節の関係はどのようなもののでしょうか。他人をつまづかせてはならないという教えの後に、なぜ自分をつまづかせてもならないという教えが来ているのでしょうか。ある人は「単に他人をつまづかせなければいいというだけではない。人のことだけでなく、自分自身をつまづかせる罪の課題とも取り組まなくてはならない」というメッセージがここにあると見ます。ある人はもう一步突っ込んで、「私たちは他の人をつまづかせてはならないが、そのためには自分をつまづかせる罪とも戦わなくてはならない。自分の内にある罪を許容しておく、そういう姿勢が他の人をつまづかせることにつながる」と読みます。いずれにしてもはっきりしていることは、つまづきを避けるように！ということです。それは大変なわざわいを他人にも自分にももたらすものであることをわきまえて、これを警戒し、これと関わりを持たないように自らの生活を整えて行かなければならないということです。

最後10節以降でイエス様はもう一度「この小さい者たちの一人を軽んじたりしないように気をつけなさい」と言われます。ここでは特に父なる神との関係からそのことが語られています。10節後半に「天にいる、彼らの御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。」とあります。これはどういう意味でしょうか。ある人は、一人一人にいわゆる守護天使がついているという教えがここにあると見ます。しかし一人一人に個別についているとまでは言われていません。「彼らの御使いたち」とは彼ら全体を守る御使いたちと読めます。神は全能者として、御使いたちの助けがなくても、私たちを守り導くことができますが、私たちの慰めのために多くの御使いを遣わして守っていてくださるということを聖書は述べています。ヘブル人への手紙1章14節：「御使いはみな、奉仕する霊であって、救いを受け継ぐことになる人々に仕えるために遣わされているのではありませんか。」その御使いは父の顔をいつも見ている。つまり父なる神にいつも近付いて報告している。言い換えれば父なる神は小さき者たち一人一人のことを常に心にかけ、大切にしておられるということです。

12 節以降の、迷い出た一匹の羊を探し求める羊飼いの譬えも同じです。これはルカの福音書 15 章に出て来る譬えとして私たちになじみがあると思います。神は一匹の羊を大事にします。一匹がいなくなっても 99 匹は残っているから OK とは言いません。迷い出た羊は手がかかる羊です。みんなと一緒に行動しない、ある意味で自分勝手に、自業自得の悲惨に陥っている羊です。しかし神はそんな小さき者も蔑まない。99 匹をそこに置いたままにしても捜しに出かける。そして見つけたら大きな喜びを心に抱く。天の父はこのように小さい者たちを大切にしておられる。だからあなたがたも、どんな小さな者たちも見下げてはならない。この神のお心を反映するようであってはならないと言われているわけです。このテーマはこの後見る来週の箇所以降にも続いて行きます。

以上の御言葉に照らして私たちの心の向きはどうでしょうか。正しい方向を向いているでしょうか。天の御国に入れていただいた者らしい特性を発揮しているでしょうか。もし私たちが「だれが一番偉いか」と論じ合ったり、このことに熱心であるなら、天の御国に入っているかどうか怪しいということにもなって来ます。その人は福音が分かっていない。日々恵みにより頼む生き方をしていない。神の国の民としては重大なことが欠落していることになります。しかし改めて今日の御言葉から確認させられることは、私たちは神の前に貧しい自分をそのまま認めて OK なのだということです。いやそのように認めている人だけが天の御国に入る者とされる。神の前で偉い人は一人もいません。みんな罪人です。誰一人自己推薦できません。そんな私たちが神に受け入れられるとすれば、それはただ神の恵みによります。この神の恵みを喜び、感謝する人は、自分と同じような小さい人たちを大事にします。イエス様が大切にされている一人一人と考えて、その人たちを大切にします。決して見下したり、高ぶった言動をもって、その人をつまづかせるようなことはしません。この御言葉に照らして自分の向きは正しいかどうかを確かめて神が招いておられる道へ進みたいと思います。本当は少しも偉い者ではないのに、虚勢を張って上へ、上へ、と上ろうとする者でなく、社会における子どものように自分を捉え、低い心と感謝の心でいつも振る舞う者でありますように。そして小さな者たち一人一人を大切に、尊んで、ともに歩む者でありますように。そうする人こそ、イエス様また神様の恵みを感謝をもって受け取り、その恵みに生きている人です。その人こそ、イエス様また神様と同じ心を持ち、またその神を映し出す歩みをしている天の御国に属する真に幸いな人なのです。